

当院透析室における医療安全の取り組み

工藤宜子、今西 望、庄司裕太、高島俊介、平塚広樹、村上 亨、鈴木由美子、

齋藤拓郎*、秋濱 晋*

社会医療法人明和会 中通総合病院 血液浄化療法部、同 泌尿器科*

Medical safety initiatives in our dialysis department

Noriko Kudo, Nozomi Imanishi, Yuta Shoji, Shunsuke Takashima,

Hiroki Hiratsuka, Toru Murakami, Yumiko Suzuki,

Takuro Saito*, Susumu Akihama*

Division of Blood Purification and of Urology*

Social Medical Corporation Meiwakai Nakadori General Hospital

<緒言>

当院の医療安全委員会では、各部署に医療安全推進担当者を配置しており、透析室においては看護師1名、臨床工学技士1名の計2名で担当している。日常的に業務で医療安全に関わることを注意喚起しているが、時間の経過とともに意識は薄れ、同じことを繰り返していた状況があった。当院の医療安全推進担当者は委員会内で危険予知訓練（以下KYT）を実施しており、透析室に活かせるのではないかと考えた。

KYTとは危険要因を発見し、解決する能力を高める気づきの訓練のことであり、多くの危険が潜んでいることに自分自身が気づくことを目指して行う¹⁾。一般的にイラスト（図1）を用いて実施することが多く²⁾、その状況に潜む危険性を予知し、その対策をグループで検討する。どんな危険があるか、危険のポイントは何か、グループで対策を立て、目標設定をするという順番で話し合う。これには正解不正解はないため、各々が意見を発信しやすくなり、部署全体で気づきが共有される。

当院透析室では、一人一人が危険の気づきを増やし、当事者意識を高めて透析室の安心安全に繋げることを目的に、KYTを実施したので、その効果について報告する。

<対象と方法>

当院透析室では、透析室の写真を撮影してKYTを実施した（図2）。透析室の写真を用いることで、自分の仕




図1 一般的なKYTイラスト



図2 当院透析室のKYT写真

事場に直結する気づきを得られ、危機意識を高めることができると考えた。

参加者は、透析室の看護師、臨床工学技士、看護補助者であり、1グループ4人程度の3グループに分け、KYT用紙を用いて実施した（図3）。各グループで、KYT用紙の透析室の写真をみてどんな危険が潜んでいるか意見を出し合い、その中で特に危険なポイントだと感じたことに対する対策を考え、対策を立てたものを元に目標設定をした。最後に各グループで話し合った内容を発表した。更に違う写真を使用し、これを複数回実施した（図4）。



①どんな危険ポイントがあるか
※写真に潜む危険ポイントを見つけ、それを引き起こす現象を話し合いましょう。
「○○なので（要因）、○○して（行動）、○○になる（現象）。」

②危険ポイントに対する対策
※危険のポイントを解決するにはどうすれば良いか具体的に対策を立てましょう。「○○○○○する！」※「○○○しない」はダメ。

私達はどうします！目標設定しましょう。⇒
「○○○する時は、○○を○○して○○○する！」

図3 当院透析室のKYT用紙

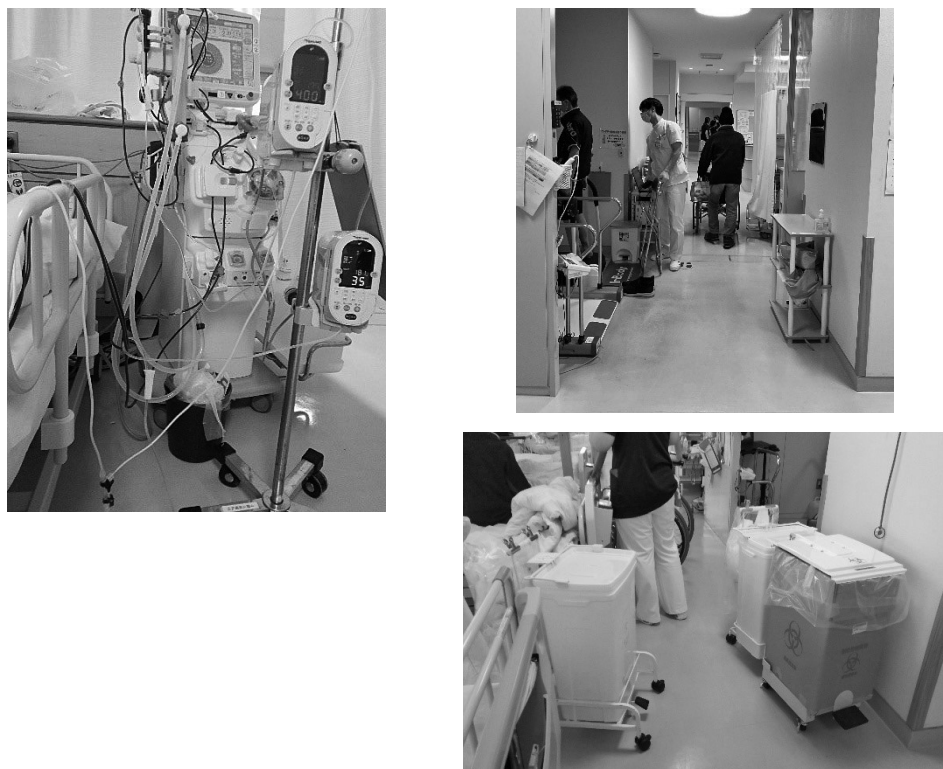


図4 実際に使用したKYT写真

<結果>

様々な視点から危険ポイントを発見して発信し、気づきを増やして全体で共有した。危険ポイントをグループ毎に発見し、感染性廃棄物の蓋を開けて血液が聴診器につく感染リスク、人や車椅子などの障害物が入り乱れていることでの衝突リスク、感染性廃棄物のキャスターの足に患者がひっかかることでの転倒リスクがあるというように、様々な気づきが発信された（図5）。その後、危険ポイントを絞った対策、目標を立て最後に発表し、情報共有することで更に気づきが増えた。最初は何を発言すればいいのか悩んで担当者に聞いてくることもあったが、KYTの回数を重ねる毎に要領をつかみ話し合いも活発になり、新入職員からも自然と意見が出るようになった。



図5 KYTの一例

参加者から「イラストを使用した場合より、実際の写真の方が危険ポイントに気づくことができた。」、「少人数のグループで実施したため、若手も意見を言いやすかった。」、「KYTを行う前は乱雑に物を置いてしまっていたが、患者が転倒しないよう意識が働くようになった。」、「経験年数が少ないためか危険と判断できない事もあり、KYTで学ぶことができた。」などの意見があがった。

<考察>

医療安全への意識を高めるため、注意喚起を行っていたが「時間の経過とともにその意識は薄れ、定着せず、また注意喚起を行う」ことの繰り返しになっていた。

KYTを行うことで、安全確認行動をするための意識向上や新たな危険の気づきなどの効果が報告されている³⁾。当院透析室においては、透析室の写真を活用したKYTを実施することで、自分の仕事場に直結する気づきを得られ危険に対する意識が働くようになり、一人一人が医療安全の当事者であることを自覚し、意識を高く維持できるようになったと考えられる。さらに看護師、臨床工学技士、看護補助者などの多職種でKYTを実施し、様々な視点からの意見を共有することで新たな気づきを得られたと考えられる。

月1回程度のKYTの実施により危険に対する意識付けや危険に対する感性を高める効果が得られるという報告⁴⁾があることから、定期的の実施していく必要がある。

<結語>

今後も継続してKYTを実施し、スタッフの医療安全への意識を高めてそれを維持することで、多職種で協働して透析室の安心安全に繋がっていきたい。

<利益相反>

本研究に関して開示すべき利益相反はない。

<文献>

- 1) 中外製薬株式会社、ナースのためのKYT、<https://chugai-pharm.jp/contents/za/039/>
(2024年12月6日 最終閲覧)
- 2) 公益社団法人福岡県看護協会、実践！KYT～ノンテクニカルスキルを学ぼう～、
<https://www.fukuoka-kango.or.jp/blog/99/detail>, (2024年12月6日 最終閲覧)
- 3) 危険予知訓練を取り入れた意識向上への取り組み
https://www.jstage.jst.go.jp/article/nnigss/58/0/58_0_194/_article/-char/ja/
- 4) 当施設で月1回の頻度で実施した危険予知訓練（KYT）の実際とその効果について
https://www.jstage.jst.go.jp/article/cjpt/2010/0/2010_0_GbPI1461/_pdf